



United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)

開倫ユネスコ協会主催 ネパール大地震 激励会

2015年5月12日(火)、足利市研修センターにおいて開倫ユネスコ協会が主催する『ネパール大地震 激励会』が行われました。鈴木一昭副会長の開会の言葉に続いて、ネパール大地震の被害者に対して黙とうを捧げました。

林明夫会長のあいさつに続いて、ラムサル・ビカスさんから「ネパール留学生からの訴え」がありました。また、本部校に勤務されているパンデー・サパナさんから、大地震直後のネパールの様子を写真とともに報告していただきました。その後、励ましの色紙を贈呈させていただきました。最後に、津久井一則副会長から感動的な『支援の言葉』が述べられました。ビカスさん、サパナさんとも、津久井副会長の言葉(裏面)を一言ずつかみしめながら聴き入っていました。

『がんばれネパール』『We Support NEPAL!』『We Live Together!』



林明夫会長



ラムサル・ビカスさん パンデー・サパナさん



津久井一則副会長



励ましの色紙を贈呈



ネパール大地震について語るビカスさんとサパナさん



支援の言葉

開倫ユネスコ協会 副会長 津久井一則

この度のネパール地震に際しまして、亡くなられた方々に心より哀悼の意を表しますとともに、家族を失われたり、被災されたりした方々、そして、関係者の方々に心からお見舞いを申し上げます。あまりにも突然の災害に、そして、その被害の大きさに、貴国の国民の皆様におかれましては、深い悲しみと絶望を味わっておられることと、拝察いたします。

そのような皆様方に、励ましや勇気を送る言葉など、簡単に見つけようがありません。しかしながら、自然の猛威という悪魔と必死で戦っておられるネパールの国民の皆様に対し、私たち日本国民は、離れた地からではありますが、精いっぱいのできる限りの支援をさせていただきたいと願っております。

私たち開倫塾には、ネパール出身のピカス先生、サパナ先生というすばらしい人材が働いて下さっております。お二方の母国の震災以来、悲しみと怒りと悔しさで眠れぬ夜を幾夜も過ごされていることと、心が痛みます。そのお二方に、私たちは心から強く申し上げます。励ましの言葉より、勇気が湧く言葉より、今この場でお伝えしたいことは、私たち開倫塾の社員一同は、林塾長を中心として、お二人に寄り添い、悲しみを分かち合わせていただきたいと。

どうか、豊かな自然に囲まれ、おおらかで誠実な国民性をもつ貴国の素晴らしさを、そして、必ずや復興へと歩みを強く強く進めていく、生命力に満ち溢れた貴国のことを折に触れ、私たちに話してください。

スウェーデンのことわざに、「喜びは人に話すと倍になり、悲しみは人に話すと半分になる」とあります。復興には時間もお金もかかります。悲しみもすぐには癒えません。心が凍えそうになったとき、どうか、お二方の近くには、開倫塾の仲間がいることを思い出してください。そして、たくさん話してください。私たちもお二方に寄り添い、一緒になって悲しみ、そして、復興していく様子を一緒になって喜んでいきたいと切望いたします。

4年前、東日本震災があったとき、被災した子供たちが欲しがっていたものが、ぬいぐるみだったそうです。私は恩師よりその知らせを聞き、校舎の子供たちや保護者に呼びかけ、できるだけぬいぐるみを送らせていただきました。後日、新聞でぬいぐるみを抱いている子供たちの写真を見ました。夜眠れるようになった子もいたそうです。安心したような子供たちの表情をみて、人は、大変な時は、一人でいてはいけない、人に支えてもらわなければいけない、人の優しさを欲しなくてはならないと感じました。

東日本震災の時、日本は、貴国からも多大な支援をしてもらいました。今度は、私たちが恩返しをする番です。サパナ先生、ピカス先生、私たち開倫塾社員一同、貴国の震災からの一日も早い復興を、そして、さらなる発展を、心よりお祈り申し上げます。

最後に、古代マケドニアで東征に旅立ったアレキサンダー大王は、旅立ちの時、自分の財宝をすべて家臣たちに分け与えたというエピソードが残っています。不思議に思った家臣の一人が「大王は何を持って東征に赴くのか」と質問をしたところ、「私は、希望を持って東征にゆく」との言葉を言ったそうです。

復興への道は遠く険しいかもしれませんが、しかし、必ず貴国は復興します。「必ず良くなる」「必ず幸せになれる。」そう確信し、ともどもに、希望の松明を持ち、雄々しく進んでまいりましょう。